

- ◎正月早々に新しい運転免許証ができあがってくるというので、自転車で茨木警察まで行くついでに、ちょっと歩いてみよう、カメラとICレコーダー、パンとお茶をもって出発した。
- ◎山に行きたいと思うが、なかなかふんぎりがつかない。なんだかコロナめがまたまた猛威を奮っているとか、世間は喧しい。天気も正月明けぐらいから寒くなり、山の方は雪が積もっているのだろう。
- ◎新しい免許証には、2024年（令和6年）まで有効と書かれている。昭和生まれのオレにとって、平成という元号もはっきりしないのに、令和になって、「今年は何年だっけ」と毫碌ジジイの体のようだ。
- ◎安威の方から、萩谷方面に行ってみようと川沿いに自転車を走らせると、ぽこり小山がある。斜面に墓石が並んでいる。「あれは なんとかいう 古墳 じゃなかった のかな」と登って見るも、「古墳の コの字もない耳原公園と 書いてあるだけ」オレのカン違いか、かつては古墳とされていたが、調査によって、ただの小山に降格したのか、ま、いいか。
- ◎耳原公園の上には大きな石の石碑が二つもある。一つは明治二十一年、参謀長やら陸軍大佐やらの名が刻まれている。表の漢字はかすれ、難しすぎて読めない。「戦意向上 武運祈願 かな」もう一つは大正で、当時の天皇がここに来たらしい。裏側には、「三島村・福井村・安威村・春日村：現在の茨木市内の名前が見える」そんなたいそうな場所にしては、ただの小山とは、不思議だね。
- ◎その横に、鼻擦（ずり）古墳というのがある。小さい盛り土程度のものだが、これは看板がかかっている、ちゃんとした古墳だそうだ。四角の方墳、一辺33M、高さ5M、濠幅7M。散々の盗掘にあいほとんど何もなく、ただ、土器片が出たとか。
- ◎細い川沿いに進んでいくと、埴輪工房の跡が公園になっている。この辺りは何度か通っているが今日のようにゆっくり見るのは初めて、「えええ そうだったのか」と驚かされるいろいろが、復元され解説されている。
- ◎元来、藍野病院の横にある前方後円墳が継体天皇陵だとされていた。今もしめ縄が張られ、番人がいる。ところが何年前に、今城塚古墳が継体の古墳だと言われ、大王の杜という公園になっている。巨大な埴輪がずらりと並び壮大なものだ。
- ◎茨木と高槻の山すそには古墳群が散乱しているらしい、ということは前から知っていた。なんでこんな辺鄙な場所、奈良の都からすれば遠く離れた“ど田舎”であるこの辺りにたくさんの墓があるのか、学者の意見は知らないが、“墓場の場所”として当時の奈良の都人の流行か、憧れだったのか・・・。
- ◎はにわ工場公園：1500年前日本で最古最大の埴輪制作の場所らしい。450年～550年の100年間ぐらい。工房が3棟、窯が18もあったらしい。窯は今の陶器用登り窯の三分の一ぐらいの面積かな。埴輪は人の背丈ぐらいの大きさのものがあるので、こんなものを何千も造るには、人で、材料の粘土、燃料の材木がたくさん要ったはず。日本最大の大仙古墳では三万本の埴輪が並んでいたそうだ。
- ◎浦上敏臣：阿武山に京大の地震観測所がある。（高槻市だが、オレが高校生時代、高い建物が無い時代、いつも白い塔が見えていた。）1934年に施設工事の折、漆塗りの柩が出土した。中には錦をまとった遺骨がほぼ完全な形で残っており、ガラス玉をはめ込んだ枕もあった。60歳前後の男、骨折の痕、朝廷の儀式に使用した金糸の刺繍などが出土、すぐに埋め戻された。
- ◎日本書記には、鎌足が摂津国：三島に葬られたと書かれている。ほぼ藤原鎌足の墓と言われている。
- ◎今日は河原を走るのではなく、ちょっと高槻方面に早足で歩いてみた。古代の歴史、古墳の話になるといささか興味をひかれるが、この辺りもなんだか人だらけ、家だらけになってきた。大正のころのでっかい石碑の時代、小高い丘に登ればほとんどが山地、所々に田畑、ぽつりぽつりの藁ぶきの家があったぐらいでは。古墳だ遺跡だというけれど、ただの森、ただの草むら、のどかな村、里山だったのかな。はにわ公園もなだらかな丘陵地、竹やぶに覆われていたのかな。いまや隙間なく家が立ち、高層住宅が景色を遮り、道路は猛スピードの車が右往左往する、そんな街になっている。

- ◎コロナめ、ますます活躍しているとか。ザックを担いで電車に乗るのとはばかれるかなと、またまた、毎度マイドのポンポン山を目指している。今日は大寒波というわりには青空だ。天気予報が波浪注意報や風雪注意報と言っている。今朝は6時に目覚め、「よしくぞ」と決めた。7時ころに洗濯物を干していると、吊り下げ洗濯ばさみを付けようとする、なんと固まっている、凍りかけている。安威川の橋を渡りながら下を見ると、本流の半分ぐらいに薄氷、洗濯ものが凍る、安威川の氷、びっくりだが、とにかく寒い。
- ◎今までの経験から、極寒の山で、零下10度20度の中で、頭の寒いのは毛糸の帽子の上からジャケットのフードを被れば何とかしのげた。今はネックウオーマーという便利なものもある。手は二重手袋で何とかしのげた。足先は冷たいね、どんどん歩くと冷たさは感じないが、自転車は足先がちんちん冷える、足先が冷えると、車の運転も足先が冷えるけれどけれど、足先が冷えると頻尿で困る。
- ◎芥川山城：摂津峡の上の口に、「ここから 城跡に行けます」という立派な看板がある。すぐその上に小さい城跡があるのかなと思っていたが、自転車を降りて歩き出した下の口にも古びた看板がある。二つ城があったのかと訝ったが、どうも立派な城が摂津峡の対岸てっぺんに在ったらしい。16世紀に建てられた山城だったそうで、なかなか大規模な城だったようだ。いずれ、あの山城跡を探検しよう。芥川氏もいたようだ。
- ◎今、神嶺山寺の横、舗装道路を歩いているが、しみじみ思う、「足が遅くなった 早く歩けない」ということだ。自分自身は、以前と変わらずスタスタ歩いているつもりだけれど、若い女の子にも抜かれてしまう。トボトボではないだろうけれど、以前のように地面を蹴れないね、ちょっとの距離が、時間がかかるね。登りも速度が遅くなっているだろうけれど、今のところ足が止まるということはない、許せる、ジーゼルエンジンだ。
- ◎8時に家を出発。9時に摂津峡の下の口を出発。10時にいよいよ登山道。高速道路そばから本山寺に向かう。大きな木が倒れている、例の台風の痕だ。おそれながら、キジを打たせてもらいました。
- ◎ゆっくり歩いていると、ケタイな樹に遭遇、「よくもここまで 曲がりくねって」じっくり探せば、山の中にはまだまだ、捨てがたい樹、おもしろい樹が棲んでるねえ。
- ◎最後の鉄塔かな、大阪の街が見える、高層ビル群が見える、「あれ あれれ あれは海 大阪湾が 見えるじゃないか 海の向こうの山は どこかねえ」空は青い、白い雲がによきによき、東北は大雪かな、例年雪かきに行っていた金沢のちよい向こう、ライブカメラでは雪が少ない、温暖化だねえ。
- ◎1時間ちょっとで林道に合流した。リンゴを喰おう、ナイフで半分に割る、半分をザックにしまう、ガブリ、旨い、果汁が喉に流れ込む、リンゴを噛む、旨いねえ、歩きながらむしゃむしゃ喰った。もっと欲しいなあ、ザックから半分を取り出し、ガブリ、リンゴがこんなに旨いとは、山サマサマだねえ。
- ◎1時間ちょっとで、てっぺんにやってきた。途中、手が冷たい、手が痛い、温度計は-1度、うっすら1センチぐらいの雪が残っている。空は半分青空、きれいな空。飯を喰う、炊き立ての玄米飯に、キンピラゴボウとレンコン、青菜のおしたし、テルモスの湯、飲みごろになっている、テルモスあまり性能が良くないね。
- ◎1時間ぐらい下ってきた。登る時も、てっぺんでも、手袋が離せないぐらい寒かったが、ここでは手袋をしなくても平気だ。温度は3度。アトリエにあったチョコ入りクッキーと柿の種を持参した。チョコ入りクッキーは旨い、もっと欲しいなとすぐに無くなった。柿の種、ランをする人が、「みなさん ペットボトルに 柿の種を詰め込んで 水を飲むように 走りながら ポリポリするのが 日本の選手」と聞いていたが、これはオレの口には合わない。まだあるな、ぽりぽり、旨くないな、ぽりぽり、である。
- ◎神嶺山寺の鳥居を出たところに牛地蔵というのが。普段は、「なにか 地蔵さん」ぐらいに思いながら素通りしていたが、ここんどこ、右や左の看板が気になりだし、興味津々のオバタリアンになったのかな。ゆっくり水を飲みながら、今日もたくさん歩いた、いささか疲れてきたなと腰を下ろした。
- ◎牛地蔵はかつての物流、荷役に使われた牛を祀ってあるらしい。淀川の三島江に、神嶺山寺への道標がある、かつて淀川が交通の大動脈だった頃の話。牛の背に乗せたり、荷車を曳かせたり、牛も馬もがんばったんだ。
- ◎今日登った登山道に、「旧参道」と書いてあった。「登山道が 参道？ 旧とはいつ頃のどこの話？」

内田隆三著<社会学を学ぶ>

◎社会学とはなんだろうといぶかりながら、ページをぱらぱら。中身はなかなか難しいが、柳田国男の民俗学のことが書いてある項を発見した。まずは身近なところからと・・・。

◎社会学は近代社会の運動を切り開く、「歴史の現在」相対化する問いとともに始まり、その問いを鋭化し、屈折させ、変形する営みである。日本社会も産業資本主義を基盤とする工業化や都市化の過程で、西欧社会とよく似た現実をだかえこむようになる。柳田国男も農商務省の官僚として、日本の農村の近代的な再編を目指す。が、芳しい成果は得られなかった。近代的な合理性を表層でしか受け入れない、日本の農村の固有の問題、<習俗の世界>が広がっていた。

◎西欧社会の社会理論の多くは、宗教の世俗化とある種の合理性を、その合理性を担う個人の主体性を要求し前提としている。西欧社会の共同体の観念も、日本の習俗の世界に当てはまるものではない。

◎習俗、これはなんだろう、「日本人の習俗 習俗だけの問題 かな」これでいいのだろうか。

◎先に、パラパラめくった本、大澤真幸著<憎悪と愛の哲学>の中での抜き書き。

◎フランス文学と哲学の研究者、森有正 1967 没のエピソードより：あるフランス人女性との会話の中で、「三発目の原子爆弾はどこに落とされるだろうか」その女性は間髪入れず、「それは日本よ」と答えた。森有正はびっくりした。日本はすでに広島と長崎に二発も被爆している。その女性は、「日本は 原爆のような 凶悪な爆弾を 落とされたのに 落とされた敵に あれほど怒らない 国民はない」「日本は アメリカに まったく抗議を していない」「そんな国は また 原子爆弾を 落とされるかもしれない」

◎この話の真偽はわからないが、考えさせられる。戦争直後にアメリカが、日本国民に、また、被爆地の人々に、調査をした結果がすごい。「原爆投下に対して、アメリカに 憎悪を感じるか」という質問に、「感じる」と答えた人は、日本人平均で 12%、被爆地でも 19%だったそうです。

◎日本人は、恨みの対象にしてもよいような相手に対して、恨みや憎しみをそれほどいだかない。アメリカに対して反省や謝罪を強く要求しないし、恨んではない。自身が恨まないの、だれかが恨んでいるということを感じにくい。かつて、侵略戦争や植民地政策で中国人や朝鮮人に、謝罪を求められたり恨まれたりすると、ひどく当惑する。

◎ここまで読んで、「そうだね どうでもいいや なるようになるさ」というような気持で生きていくのはよくないかなとも考えさせられる。思い出したら汗が出るような屈辱や、もはや完治しているのに痛めつけられた傷がいまだに疼く、こういう負の遺産は誰もが持っている。負の遺産の大きさが関係あるのかと言えば、それは無い。心身に追った負の遺産の大小は、個々人の問題で、個々人の精神のブレによる。いかにささいなことでも時間とともに増幅して精神まで潰してしまう人もいれば、笑って済ませてしまう人もいる。日本人が、恨み痛みに鈍感であるとは思わないけれど、「他人を許す」「その行為を許す」「そういうことを忘れようとする」という人が多いかもしれない。

◎先生の話の続きに、原子爆弾を投下させた、当のアメリカ人、原子爆弾を作った人たち、こういう人たちの話が載っている。世評では、「アメリカ人は 謝らない」「アメリカ人は 原子爆弾を投下したのは 戦争を終わらせるためだった」というように言っていると思っていた。アメリカ軍は、広島長崎に投下することによって、非戦闘員、民間人に被害が及ぶこと、凶悪極まりない武器によって、地球規模で被害が及ぶことを知っていた。それでもなおかつ、原子爆弾を投下した。原子爆弾投下を決断したアメリカ人、二発も実験的に投下したアメリカ人に対して、あらためて、怒りを覚えるねえ。

大澤真幸著<憎悪と愛の哲学>

◎前回に続いての社会学。「社会学となんだろう」という疑問からいささか知識が増えた。TVの解説でもできそうな、現在、現代、過去の問題なら何でも答えられるという学問かな、「そらあ お前さん バカにするな」なんて怒られそう。大澤真幸先生の本をまたまた借りてきて読むうちに、「これは面白い 好きなところだけを抜き出して 楽しもう」ということで読んでいます。本の中の全部を読むには膨大すぎ、しかも難しい、面白い所をつまみ食い、わがまま許してください。

◎緊急事態宣言：日本では、「国家緊急事態」が正解、非常ではない。どうもこれは同じもので、翻訳の違い。

英 National Emergency 国家非常事態

米 State of emergency 緊急事態宣言

緊急事態とは、憲法や法律が想定していなかった問題が起きたことで、基本的な人権や私権の一部が権力によって制限されることが起こり得る事態だ。日本は戦争に対する反省から、緊急事態時の権力のあり方について深く考えてこなかった。現状、今現在のコロナ禍で、自粛要請という小さな緊急事態宣言にとどまっているが、今後、これ以上の事態が起きかねないことから、検討すべき課題だ。一つは権力が乱用され、常態化してしまうこと。二つ目は逆に為政者が臆病になって断固とした措置が取れなくなることだ。

◎日本が過去に、戦争に突っ走った、「国家緊急事態宣言」これを使ったんだねえ。TV解説者の中に今回のコロナ禍で、政府が出す国家緊急事態宣言に対して、もごもご言っておられる方がおられる。「今回のような自粛要請という ぼやけた話じゃなくて 政府が 本気で 国民を縛り 罰則を伴う 国家緊急事態宣言を出せば 国民は 言うことを 聞かなければいけない」「いうことを聞かない奴は 国から罰則が与えられる お灸がすえられる」ということなんだ。日本は自由な国だけど、まわりの、隣近所の国々は、「お上のいうことを聞け 聞けない奴は 処罰する」といわれ、国民が縮みあがる強権国家がたくさんある。

◎指定感染症という法律があり、コロナ君は上位に指定されているので、コロナの陽性患者は入院しなければいけないとか。社会学では、こういう話題も学問のひとつらしい。なんで、だれが、指定したのかな。

◎オレの話：日記風にぼやきを語れば、コロナがうつるのが嫌だから雑踏にはいかない、仲間と会食しない、公共交通機関も長らく乗っていない。これが普通の風邪ならば、普通に暮らせるが、罹れば重篤になるやも。冬になるまでは、欧米に比べ重篤者も死者も少ないと思っていたが、冬になって重篤者も死者も急カーブで増えている。アジア以外の国々の感染者数字が桁違いに多い、戦争状態同様にほんまものの、「国家緊急事態宣言」が必要だ。このコロナ禍め、今後どうなっていくのか、いささか鬱陶しい話だ。

◎カフカの「ペスト」を読んだというかんちゃん。オレは二十歳代に読んだが、まったく記憶にない。苦境に陥った人々、医者・市民・よそ者・逃亡者・・・と登場人物があるようだ。感染症にしろ、地震・台風・・・災害は起こるものだといまさらながらに思う。まだ戦争がないだけいいのかもしれない。

◎ペスト：この伝染病は地球上で何度か猛威をふるっていた。14世紀に中国大陸で発生、内戦とペストで中国の全人口の半分が死亡した。その後ヨーロッパ・北アメリカ・中東に広がり、人口の何割かが、およそ1億人たらずが亡くなった。19世紀にも、中国で始まった流行は、世界交易地の香港で大流行した。日本より派遣された北里柴三郎らが、ペスト菌を発見、ネズミの駆除をした。

◎ペストのことを調べると、明治以前には、日本にペストは無かった。その後何度か流行したが、日本では大流行は無かったようだ。

◎コロナ禍の今、「大丈夫 ちょっと 出かけようか」と誘ってくれる人。「せっかく 誘ってくれたけど この数字はいささか・・・なので行かない」と引き籠っている人、さまざま。昨今の茨木市内、昼の時間でもほとんどの方々がマスクをつけてうろうろしておられる。

大澤真幸著<憎悪と愛の哲学>

- ◎神：God という概念についてみんなで考えてみよう。日本語の、「神」ではなく、God ですよ。日本社会は一神教の影響をほとんど受けてこなかった。いわゆる先進国で、一神教とこれほど無関係な社会はほかにない。日本にも八百万の神はいるが、一神教の意味での神は、日本社会を理解するうえであまり役に立たないのではないか。神を信じていない日本人も、「空気」には関心がある。「空気が読めない」ということは日本人にとっては、一神教と神の契約を守らないのと同じぐらい悪いことである。
- ◎新約聖書、「人は水とプレウマ（聖霊）によらずば、神の国に入ることあたわず」これを、「人は空気と水によらずば、人の国に入ることあたわず」とすると日本人に当てはまる。
- ◎「神」と言われるとたちまち困ってしまう。前にも書いたが、山の話、山がこよなく好きなくせに、高所恐怖症がある。危険印、岩場や痩せ尾根、急な斜面を横切るトラバース、急流の岩場の移動、などと様々な怖いところがある。なるべくこういう怖い場所に近づかない登山をしてきた。「岡村さん 大丈夫だよ 平気だよ」この言葉、澤山さんの言い草は、「いいから 付いて来い」の裏返しだったかな。甲斐駒ヶ岳の登山の話。高遠付近の戸台で車を止め、戸台川沿いに北沢方面に向かう。昔はバスなんてなくこの道を何度も通った。今、地図を調べると、「熊の穴沢」を登ったと思うが、一般的でない破線で記されている。なんとか登って尾根道を行くも暗くなってきたので六合目小屋でテントを張った。雪の中、尾根道もラッセル気味で、甲斐駒ヶ岳の祠を見たときには思わずへたり込んで、「助かった」とぬかずいた。祠のあるところは北沢峠から何度も登っている一般ルート、危険な箇所がないよく知った登山道に出たの、喜びだった。
- ◎衣川さんと大嶺奥駆道を歩いた。七日間の行程。始発の電車に乗って朝には吉野についていた。それから毎日十時間以上登ったり下ったりの日々。無人の小屋泊まりなので、七日間の食料と寝袋、水もこの山は豊富でない。一日だけ、玉置神社で泊まって、風呂と食事を味わった。山行の間じゅう、衣川さんがさかんに数珠を使い呪文のようなお経をうなっていた。オレはそんな時も、樹々を見て、朝晩の山を見て、荘厳の中に精霊たちの歌声を感じていた。精霊というのは大げさかもしれないが、風を、空気の流れを、身にまとわせていた。
- ◎「空気の読めない奴」この言葉はよく聞くが、神と空気を並列に並べるとは、大澤先生、これはすごい。
- ◎「汝の敵を愛せよ」これほど深い愛はないかもしれないが、「汝の愛する人を憎め」この言明も同じように崇高で価値があるものでなくてはならない。
- ◎相乗と相克という対がある。
相乗性とは、典型的に愛し合う関係であり、喜びや幸福を高めあう関係である。
相克性とは、競争や葛藤を孕んだ関係であり、その極限は憎しみあう関係である。
- ◎「あなたのことが大好き 愛している」「僕もだ 愛している」この言葉、相乗性の典型だけれど、時間が経って、愛が覚め、現実が先立ち、憎しみあう、これはいかにもよく聞く話。
- ◎「僕にとって あの悔しさは 今も 忘れられない」いい歳をしたおっさんが、十歳代後半の友人が投げかけたささいな言葉に、激昂していた。「身体が小さい 身体が弱い」彼はもう故人になっているが、能弁な理論家だった。おっさんになっても細身の小さい人だったが、オレにはえらそうに話していた。オレは身体が大きいせいか、子どものころからまわりの者に、からかわれたり、けなされたりした思いが少ない。多分、これは、身体が大きいだけのせいではないと思う。憎悪を生むためのエネルギーを使っていないからかもしれない。憎悪の気持ちを自身の体内で醸し出すためには、否定され、拒まれ、痛めつけられ、盗まれなければならない。
- ◎「嫌われたい 嫌われるためには 何をすればいい」「そんな 馬鹿なことを 聞くやつが いるもんか」面白い設問を作ってみた。「好かれたい 好かれるためには 何をすればいい」という常套句を裏返ししてみたが、「嫌われたい そうして 自身の中に 憎悪の気持ちを 持ちたい」こういう文言もあってもいい、こういう考え方があってもいい、これはこれで、世界がもうひとつ拡大するのでは。

大澤真幸著<自由という牢獄>

- ◎ミヒヤエル・エンデの短編に、「自由の牢獄」と題した短い寓話がある。この寓話は、民から、「インシアッラー」と呼ばれている盲目の乞食が、教主（イスラム教の最高権威者、神の使者たるムハンマドの代理人）に話して聞かせた経験談の形をとっている。
- ◎彼は若い頃、はぶりのいい商人だった。自らの成功は、自身の能力と賢明さのせいだと信じ、うぬぼれていた。彼は冒濫的になり、アラ（神）が預言者を通じて啓示した法をないがしろにするまでになった。例えば、断食の月すらも無視して、飲み食いして過ごした。
- ◎ある時、美しい女が現れ、彼を誘惑した。この女は、彼女を求める彼にこういう。「私を好きなようになさいませ。でもその前にお誓いください。あなた様が今日もこれから従われるのは、あなた様の意志であることを」彼女の要請にこたえて、彼自身の眼にかけて誓った。いよいよ彼はこの不思議な美女を抱こうとするのだが、その瞬間、彼の身体は宙に浮き、星世界の闇の中へ飛び出してしまふ。女は魔王イブリースだった。気がついた時には彼は、巨大な円形の丸天井に覆われた建物の真ん中にいた。
- ◎この建物の円形の壁には、無数の閉じられた扉がある。彼は、ここからすぐに逃げだそうとしたが、どうしても逃げ出すことができない。扉という脱出口はありあまるほどある。彼の逃亡を妨げたのは、脱出口の扉が多すぎるのだ。
- ◎ライオンが待ち構えて、喰われるかもしれない。
- ◎妖精で一杯の花園かもしれない。
- ◎深淵が口を開けて、そこに落ちてしまうかもしれない。
- ◎財宝への道に通じているかもしれない。
- ◎時々声が彼に話しかけてくる。不思議な理屈を展開して、彼を困惑させた。いろいろ検索し、声の中になにか示唆があるのではないかと、考え手がかりを求めたが、結局有意義な答えは見いだすことができなかった。
- ◎やがて彼はあきらめ、扉への関心も薄れていった。脱出を渴望していた彼が、やがて何もほしくなくなった。
- ◎彼は扉のある部屋で、何日も、何年も、何十年も過ごしたかもしれない。
- ◎こういう表現は正確ではない。この場所には、時間というものがないからである。

- ◎オレは河原に毎日のように行っている。家がある茨木市は、なかなか都会だ。電車の線路が二本も走り駅からは日々、数えきれない人ひと人が蠢いている。家のそばの道路も、車が次から次からやってくる。大型店舗も家の近所には複数ある。ところが、土手を登って降りたところには、水が流れ、草が生え、歩く人が所々にいるぐらい。土手の内側は、外側が都会とは思えないような自然と静けさがある。そんな自然を求めて、鳥がたくさんいる。鳥が空を飛んでいる姿は、「それは 自由に あちこちに向かって 羽ばたき 草の上に、水の上に 降り立っている」
- ◎鳥はね、自由に空を飛び回って、遊んでいるのではないですよ。鳥博士に怒られそうである。
- ◎社会生活、基本的人権、経済生活、学校生活、職場生活、家庭生活・・・こんなことでの自由ということになると、喧々諤々、自由な発言が飛び交う日本の社会だ、これはいい。

- ◎絵ということでは自由とは何かな：オレが絵を描いていく中で、不自由はない。「自由の牢獄」で話されたような、扉も空間もない、もちろん時間もない。やがて何も欲しくなくなった、という状態に近いかもしれない。ひょっとしたら、どこかの扉を開け、覗き見て、跳んで行くような冒険をしてもいいかもしれないが、それこそ今はそういうことをしたいとも思わない。声が聞こえるというのもいい。ヒントなのか、天の声が素晴らしい解決方法を教えてくれるならば、それは最高に素晴らしい。うその話、偽善の声ならば、それに騙されコロコロ落ちていくさまも想像される。そうだ、「天の声」は聞いてはいけない。

須田桃子著<合成生物学の衝撃 The impact of synthetic biology>

- ◎著者は毎日新聞科学環境部記者。2014年理科学研究所によるSTAP細胞、小保方晴子氏らの記事を書いていた。2016年、アメリカ、ノースカロライナ州立大学遺伝子工学・社会センターの客員研究員として1年滞在した。
- ◎STAP細胞、小保方晴子。当時TVで毎日のように報じられていた事件。「大発見だ」「捏造だ」大ニュースになり、一般の人も含め皆さんが評論家で解説者、「どれが本当やらなにが悪いやら・・・」もう少し、ゆっくりじっくりやればいいのにねえ。
- ◎この本の、見出しもすごい。「科学者たちは、生物学を工学科することを思いつく。コンピューター上でDNAを設計し、その生物を実際につくってみるのだ。
- ◎「合成生物学」コンピューター上でゲノムを設計し、その情報にもとづいてDNAや、改変したDNAを持つ新たな生物を作る。作ることによって生命の仕組みを解き明かす。あるいは得られた知識と技術を駆使して人類にとって有用な生物を作る。「実際に作って見て確かめる」という工学の世界。伝統的な生物学では、観察と実験によって法則を見つけ出していくしかなかった。
- ◎高校講座：このレベルでもわからない・・・
DNA：化学物質の名前 デオキシリボ核酸。
遺伝子：化学物質が並んだ文字列 姓名を作る、起動するための情報を含む。
ゲノム：生命を作るのに必要なすべてのDNAの情報。
遺伝情報を含むDNAは細胞の核にあります。DNAは細胞が分裂する時に集まり、核の中に入っている。
- ◎現在の合成生物学が扱う対象はもっぱら大腸菌や酵母などの微生物がほとんどだが、最終目標は、人口のゲノムを持つ細胞を作ること。細胞ができたら、受精卵や人間をつくりだすことができる。
- ◎期待される分野は、バイオ燃料。医薬、化粧品、原料物質、砂漠の緑化、害虫駆除・・・多岐にわたる。
- ◎人口ゲノムをもつ生物は、自然環境にどんな影響を与えるのか。生物兵器開発などが戦争やテロに使用されないか。40億年の年月で進化してきた生命の設計図を、人間の利己的な都合で書き換えていいのか。
- ◎歴史上、生物の改変はおこなわれていた。掛け合わせや人為的選別の品種改良は数千年の歴史がある。
- ◎what is the purpose? なにが目的
Why do you want to do it? なぜそれをやりたい
What are going to from it? それによって何が得られる
What else is it going to do? これから何をしようとしているのか
How do you know you are right? 自らが正しいとどのようにしてわかるのか
- ◎世界の学者、世界の軍隊、世界の経営者、こんな人たちが、合成生物を作ろうとしている、合成生物を期待している、静かながらもどんどん進んでいる、ということなんだねえ。少し前には、「あの豆腐は、遺伝子を操作した大豆で作られているから 喰っちゃ まずいのでは・・・」なんてささやかれていたのを覚えている。犬ころのクローン、次にはヒトのクローン、臓器移植用のクローン人間、どこまで進んでいくのかねえ。
- ◎絵の話：絵を写真に撮ればコピーができる。モニターの上や印刷で見られる。世界の名画を陶板にコピーして飾られた美術館もある。「コピーは だめだよ 実際のよさが わからないよ」こういうことはいいふるされた言葉。「音楽の演奏は ライブでないと 録音じゃねえ・・・」これもいいふるされた言葉。
まわりには色があふれ、音があふれている。「まわりの 色や 音や これはこれで 素晴らしい」オレはもうそういうふうにするようにしている。まわりに文句を言って、「これはダメ」「これはアカン」なんて言わないよ。まわりにあふれた色の数々、これはこれできれいじゃないの。まわりにあふれた音の数々、これもまたそれなりにいいじゃない。オレのまわりの色と音、どんどん湧きあがれ。
オレの絵は、オレのアトリエにあるよ、いつでも、じっとしているよ、それでいい。

- ◎清谷川（と思っていたが、山の地図では、堂承川となっている）のそばの林道を北に向かって歩いている。この道をまっすぐ川沿いに進むと、高雄山や鳥獣戯画で有名な高山寺に向かう。娘たちがまだ幼い頃、おれがまだ三十歳代のころに何度か歩いた。山の地図では、東海道自然歩道となっている。どこかで昼飯を喰っている時に、黒い野良犬がやってきた。娘が何を思ったか、自分の住所、電話番号を書いて首輪にはさんだらしい。後日知らない人から電話がかかって、「お宅の犬が・・・」「えええ・・・」という笑い話の騒動があった。
- ◎愛宕山は2年ぶりかな、コロナ禍の今、初めて車でやってきた。パソコンで道順を調べると、茨木ICから京都縦貫道を通って、大原野ICで降りろという。「そういえば 近いかもしれないが 不思議な道が できたものだ」ならば、乗ってみるか、走りながら京都縦貫に入れず、間違えて反対方向の京治バイパスに入ってしまった。そんなこんなでだいぶ遠回り、淀やら、松尾やらを抜け、めざす清滝トンネルを通って、2時間以上かかり、平日は700円なり（土日は1500円）の駐車場に着いた。
- ◎昨日までの三日間、しとしと、毎日が雨だった。正月以来、乾燥注意報が出るくらいにずっと雨が降らなかったが、三日間やまない雨にも閉口した。二日目は、小雨の中、思いきって河原に出て走った、ほっとした、すっとした、川が見れた、鳥が見れた、ヌートリアまでいた。
- ◎今日は暖かい。お陽さんが照っている、暑いぐらいで、汗が出る、上着を脱いで、大杉谷ルートに登っている。先日、ポンポン山の時は、腹に吊るしたペットボトルの水が凍って飲めなかった。テルモスに入ったさめた湯が、妙に旨かった。手造りのオーバー手袋も、「これは ただの 布だ ひとつも ぬくくないぞ」というわけで、毛糸を中に縫い込んだ。そのオーバー手袋を試着のつもりでもってきたが、今日は用なしである。冬用シャツ2着とセーターだけでも暑い、手袋も、ネックウオーマーもいらぬ。
- ◎1時間で小休止、ミニ羊羹、ウグイス餅、飴をいただいた、旨い、小腹に心地がいい。空は白っぽく青い、黄砂なのか、霞なのか、お陽さんもおぼろげ。常緑樹のはっぱはクログロ、雨上がりの地面は湿っているが、休憩しているこの場所は陽だまりなので土も乾きそうだ。新緑はまだやって来ていない、葉のない細い枝ばかりと、クログロのはっぱの景色だ。
- ◎やっと月輪寺からの尾根道に取り付いた。針葉樹の植林の間をジグザグ登っていく、「空が見えるから 近いな」とジグザグを繰り返すが、空が見えなくなっていく、「あれれ まだ さきかな」なんだか今日はえらくしんどい、今までここは飛ぶように歩いてきた、とはいささか大げさだけれど、こんなにしんどいと思ったことはない。それほどに体力が落ちているのか、昨日の寝不足がたたっているのか。
- ◎駐車場のあんちゃんが、「3時間で降りてきてください コロナ禍で 長時間 山には入れません」「4:30で門を閉めます」「ああ そう」といったものの、「だれが そんな 市役所の いうことなんか 聞くもんか」と、人のいないところで、叫んだのである。
- ◎12:30でっぴんにやってきた。「お宮さんまで 行かず ここで お昼に」「オレ ちょっと 散歩させて」首無地蔵のほうまで、少し歩いた。この辺りは900Mぐらいの山がいくつか、時間があればもう少し歩きたいぐらいに気持ちのよさそうな、ポコリンが続く。北斜面に雪がほんの少し残っている。「まさか 雪が 全く 無いとは」「ピッケルまでもってきて 恥ずかしいねえ ほんとに温暖化だねえ」
- ◎北斜面の苔がいい。昨日の雨で湿っている、湿度は高そう。「この苔がいい 苔の緑がきれい 苔というのは やっぱ 雨が降ったあと みどりが 緑 みどりして みどりしている」
- ◎京都の街並みが広がっているが、どこがどこやらわからない。低層の近代ビルが立ち並んで街が広がっている。「昔なら お寺の屋根が いばっていたのに」「あれ 京都タワー ろうそく じゃない」「なら あのあたりが 京都駅じゃない」東山三十六峰、その向こうに山々が連なって、北海道が見えるかな。
- ◎湯を沸かしてインスタント味噌汁。玄米ご飯に梅干し、野菜炒め。卵にポテトサラダ、トマトに大根漬け、旨いねえ。次いでぜんざい、カフェオレにビスケット、これもまた旨いねえ。
- ◎4時前に駐車場に戻ってきた。スパッツを外し、靴を脱いだ。スパッツもいらなかった、春のぼかぼか山。

大澤真幸著<自由という牢獄>

- ◎近代は三つのイデオロギーを生み出した。変化が常態化している社会、変化が常態化している社会が資本主義。変化を押しとどめるブレーキとして登場したのが保守主義である。逆に変化を促進するアクセル役のイデオロギーが社会主義である。
- ◎フランス革命当時の話らしい。資本主義・保守主義・社会主義、よく聞く言葉だけれど、一刀両断だね。ここで登場している変化という言葉が気になる。若い頃からいつも思っていたが、「なにもかも コロコロ 変わりすぎ じゃないか」とオレは、あきれ怒っている。「変わるな」これがオレの意見。これは保守主義とか自由主義とか言った話ではなく、オレの生きざまだと思ふ。
- ◎住まいの街が変わっていった。田園地帯から都会に変わっていった。
- ◎絵の具屋に並んでいる絵の具が、製品が、変わっていった。
- ◎食いものが、衣服が、住宅が、変わっていった。
- ◎発展だ、便利だ、この掛け声のもとに、何もかも変わっていった。
- ◎変わったおかげで、非常に重宝している物が、パソコンの登場。四半世紀前からのオレの人生の半分は、パソコンの恩恵を受けている。
- ◎変化ということで、パソコンの登場以外、「変わるな」と勝手な言い分をうなっている。
- ◎絵の環境も変わってきた。従兄弟の敬治さんが旗を振っていた現代美術の世界。オレの十代のころに沸き起こった大阪発祥の“具体美術”の世界。「現代美術は オレとは 違う」と思っていたが、半世紀たって、「オレも 現代美術の世界に 立っている」という驚き。
- ◎「岡村君 おまえだって たいそう 変わってきている じゃないのかね」と揶揄されるかもしれないが、これもまた、オレの、勝手な生きざまなんだ、そおりい。

- ◎「イノセンスが壊れるとき」(無罪・無邪気・単純だが、ここでは、自分に責任がないと解釈)
- ◎子どもは、大人も含め、自分が生まれてきたことに関して責任がない。そもそも存在し、何者かとしての性質を有することに関してすべて責任がない。例えば、男女であること、名前を持つこと、この両親の子であること、特定の人種や共同体で生まれたこと・・・これらに責任はない。
- ◎子どもが、イノセンス、自分は悪くないと主張した時、普通に、「お前が悪い」と叱ることが、子どもに責任を自覚させ、子どもを成熟させる方法であると考えられている。
- ◎子どもが自らのイノセンスを表出した時、それを全面的に肯定してやると、子どもはイノセンスを解体し、本源的な受動性から解放される。
- ◎家庭養護促進協会大阪事務所のパンフレット、「事実告知事例集：打ち明ける：3条件」
 - 1「私たちは血のつながりががない親子なのだ」否定的な、「本当の親子でない」というような告知はいけない。
 - 2「私たちは あなただから気に入って あなたをもらった」選択の条件を、「賢そうだから」「丈夫そうだから」などを付けてはいけない。
 - 3「私たちは あなたに出会ってよかった」「あなたをもらって 満足している」
- ◎親が子の存在を肯定し、完全に承認していることを示す。子供の視点からすると、自身の存在は、能動的な選択を原因としておらず、純粋に与えられたものである・・・と思ってくれる。
- ◎3~5歳の孤児は、幻想的な親の物語を自ら作って信じようとしている。養い親と面会した時に、「わたしにはお父さんもお母さんもいる」と宣言した。この宣言は、新しい親との関係を引き受けられないという、イノセントの表出と解釈する。養母は「すてきな話ね その中に 新しいお母さんも入れて」と話した。子どもは幻想が肯定されたことで、幻想を突き抜け離脱して、幻想を乗り越え、新しい両親と歩み始めた。
- ◎この話は、聞くだけで、うれし、かなし、だね。